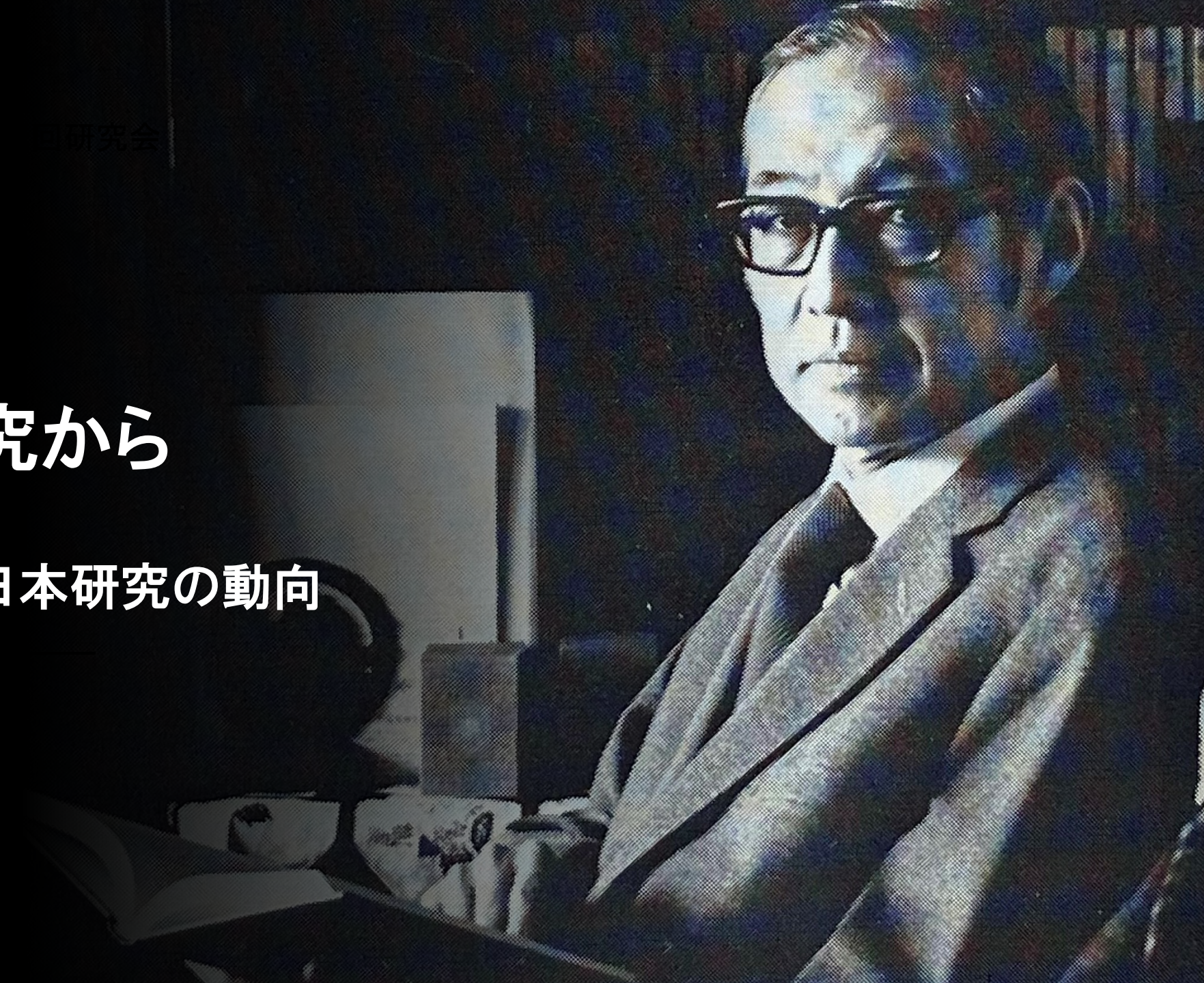


20世紀メディア研究所
第170回研究会

モダニズム研究から 日本人論へ： 南博と欧米における日本研究の動向

鈴木貴宇(東邦大学)

研究会



南博氏は超然として、自分自身とその周囲への諧謔を楽しんでいるように見えた。「日本人はイデオロギーが好きだからね」と南氏はいった、「こうやっていつまで議論していても飽きないわけだ……」

加藤周一『続・羊の歌』(1968)より

近代日本の心情の歴史

見田宗介

1968年
文庫化 1978年

「社会心理学」というジャンルにたいして、ぼくはある時期、極端な思い入れをしてきた。

高校生のころ、ちょうど初版の「まえがき」のビسケット工場のアルバイトのころ、大阪の堺の市立図書館で、南博の『社会心理学』という本を見たとき、中味をよむまえに、まずその題名にすっかり興奮してしまったことを、ひどく鮮明に覚えている。

(…)

その後さまざまな「社会心理学」書の中味に触れても、べつに幻滅するということにはなかった。それらの中味がつまらなければつまらないほど、総体的＝縦深的なあるべき〈社会心理学〉の創設という課題は、ぼくにとって、未開の沃野のもつ魅惑としてたちあらわれたからだ。



1920年代の問題との関連における、都市の文化とライフスタイル、モダニズムの積極的研究の方向は、文学というよりは社会心理学の領域で意識されていた。(…)

南教授らの立場には講座派マルクス主義者の歴史認識と、天皇紀元の時期区分との奇怪な組み合わせがみられるということである。南教授らが歴史分析の方法についてじゅうぶん問題をつきつめてはいなかったといえるだろう。

南教授らが大衆文化やモダニズムのあらゆるものを俎上にのせてとにかく考察したことは、きわめて注目すべき点でなければならない。(…)とくに国際的同時性の視点にたった1920年代の把握が捨象されていることなどは、私の研究と異なるものがある。

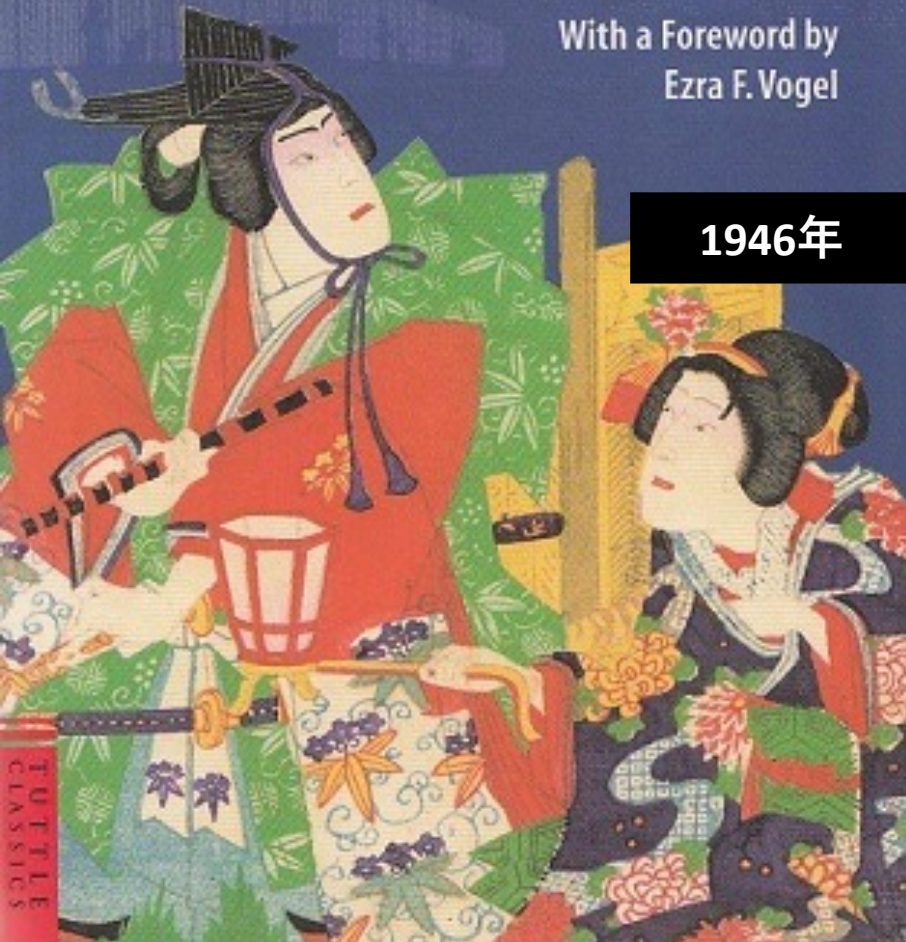
鈴木貴宇『〈サラリーマン〉の文化史』 (青弓社：2022年)

都市大衆文化の開花と足並みを揃えて色濃くなる軍国主義化の時代
にあって、その不安から逃避したいという社会心理の反映が「エ
ロ・グロ・ナンセンス」の「昭和モダニズム」期であり、この間に
現れた文化は泡沫的現象に過ぎないとする、ファシズム前史として
の1930年代論にサラリーマン論も組み込まれたといえる。戦後民主
主義的な価値観の中では否定される傾向が主流だった20年代後半か
ら30年代半ばの時期を、都市大衆文化の開花期と捉え、そこに戦後
の民主化に連続する市民社会の萌芽を見出した研究が、前述した南
博を中心に行なわれた一連の日本モダニズム研究だった。同研究の
出現によって、サラリーマンが属する新中間層の集合心理を学際的
な方法論で分析する可能性も開かれた。

Ruth Benedict
**The Chrysanthemum
and the Sword**
Patterns of Japanese Culture

With a Foreword by
Ezra F. Vogel

1946年



ベネディクトが多くのすぐれた社会学者たちによってなされた日本の政治・経済機構の分析に、十分注意を払わなかったことをしめしている。とりわけアメリカにおける太平洋問題調査会の系統を引く諸学者が、日本資本主義の分析に相当鋭く切り込んでいるのに、それが利用されていないのは、ベネディクトの日本に関する基礎知識の弱さとなってあらわれた。もちろんベネディクトはハーバート・ノーマン Herbert Normanやヒュー・ボートン Hugh Bortonの歴史的研究には大いに助けられているが、明治維新以後、特に現代史についての理解は疑わしいものがある。

ベネディクトは日本文化の固定性あるいは停滞性という面にもっぱら着目しているので、サンプルとして相当老年の日本人たちを選んだようである。在留邦人の多くは、日本で明治に生まれ、その当時の文化を身につけたまま渡米し、アメリカでは日本人の集団内に閉じこもり、日本の本国における文化の発展にも、またアメリカの文化にも比較的影響されず、いわば明治あるいは大正初期の日本文化を「純粹培養」してきた人たちである。

南博「『菊と刀』批判」（「民族学研究」第14巻4号：1950年）

大正文化

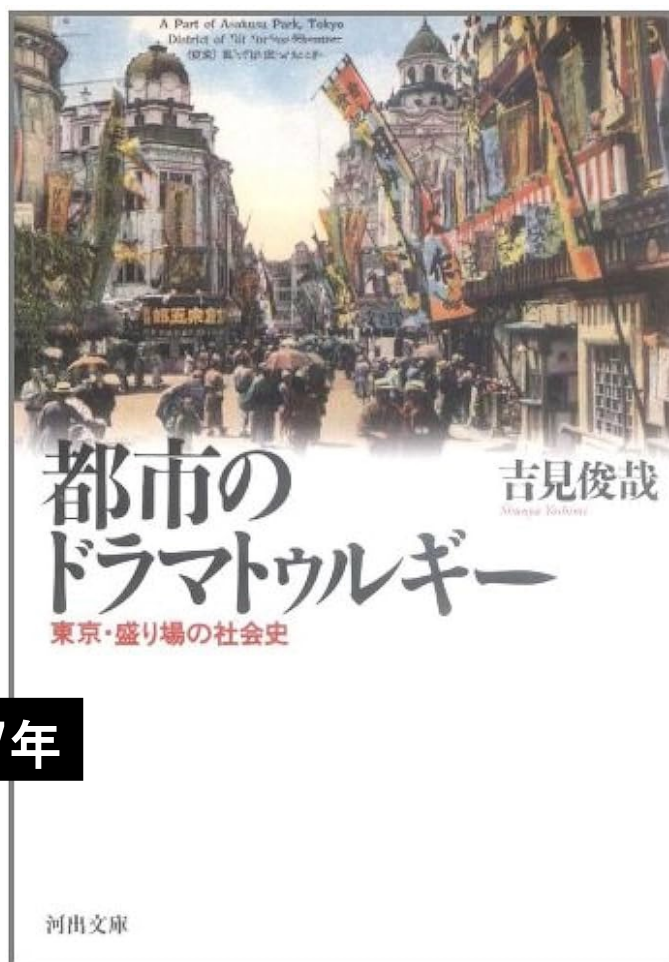
南 博 編
社会心理研究所



勁 草 書 房

『大正文化』は、日ごろ、点のからい鶴見俊輔君が高く評価してくれたことが何よりも嬉しかった。それ以後、社会心理研究所は、まず大正末から昭和初期にかけて生まれたモダニズムの問題にしぼり、ファシズムとマルキシズムとアナキズムとモダニズムとが、どのようにからみ合い、エロ・グロ・ナンセンスという言葉に象徴される文化状況に集中しているかを解明する作業を進めた。その研究会では、社会心理学、文学、芸術、マスコミ論、風俗論のさまざまなジャンルの研究者たちが、研究の交流をはかって、しだいに統一した日本的モダニズムの全体像を描こうとした。その一端は1982年刊の『日本モダニズムの研究』（ブレーン出版）、83年刊の『日本モダニズム—エロ・グロ・ナンセンス』（「現代のエスプリ」）に収めたが、いずれも日本モダニズム研究の先駆的な仕事である。問題意識としては、幕末の浮世絵、南北の芝居などに見られる当時の絵口・グロ・ナンセンスが、戦前モダニズム、および戦後現代の風俗にも、濃厚にあらわれている。このエロ・グロ・ナンセンスの三つが、何を意味するかを問うことである。

（南博「学者渡世 心理学とわたくし」）



1987年



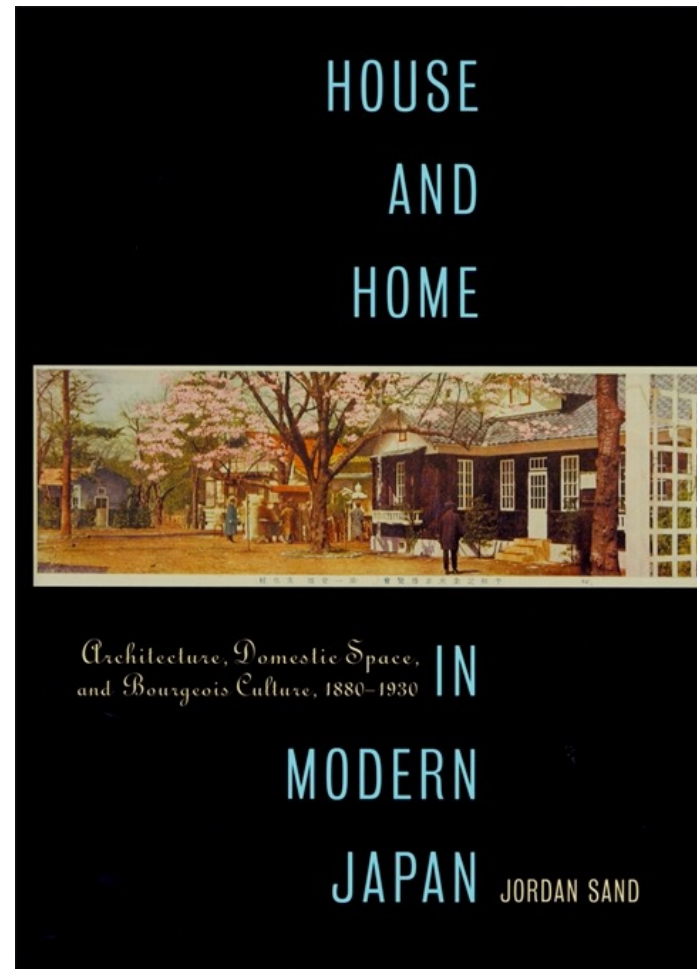
1984年



1988年



2006



2005



2003

MIRIAM SILVERBERG

EROTIC GROTESQUE NONSENSE (2006)

日本においては、南博と共同研究者たちが「モダニズム」の時代に関する歴史を最も精力的に研究してきた。この用語の使用については慎重を要するが、本書が扱う「近代」*modernism* もまた、南の指摘とほぼ同義である。南は近代文化史の研究者としてパイオニアともいうべき仕事をしており、彼の考えではいわゆる歴史学者の唱える「近代」とは異なる側面を「モダニズム」は有しており、さらにそれは二つの特徴を持つとされる。すなわち、合理主義思想や効率性を支柱とする思想の側面と、西洋、特にアメリカの映画により推進された「大量消費による解放」*liberation by mores* という側面である。本書が注目する日本の近代文化は後者にある。

JORDAN SAND

HOUSE AND HOME IN MODERN

JAPAN (2005)

南博をはじめとする20世紀初頭の文化史家は、第一次世界大戦中の日本の都市で大量に現れたホワイトカラーの職業人を「新中間層」と呼んでいる。当時は他にも「俸給生活者」、「精神的労働者」、「プチブル」、そして後に定着することになる「サラリーマン」など、さまざまな言葉が使われていた。このグループを、より限定された前世代のブルジョワ・エリートや、自営業者からなる「旧中間層」と区別するために、ここでは場合に応じて、南の使用法に従うことにしよう。階級を区別する経験的な基準はつねにある程度、恣意的なものだが、階級を指示する言語が意味を変えることに注意を払うならば、資本主義体制のなかで広く認識されている社会的区別をある程度場合に応じて使ってもよいだろう。たしかに明治時代につくられた富を継承した「新中間層」のなかには、資本の所有者や経営者という厳密な意味でのブルジョワと呼べる人はほとんどいなかった。しかしなかでの争いにもかかわらず、これらの2つの世代にまたがって単一の文化プロジェクトが進展しており、だからこそブルジョワ文化という用語を一般的に用いてもよいことを、後の章で証明したいと思う。

南博
著

日本人論

明治から今日まで



岩波書店:1994年

500点余の論著を
的確に紹介
揺れ動く議論の
流れをたどる



岩波書店

定価3800円(本体3689円)

本書は、明治以来、今日に至るまでの代表的な日本人論の文献、約600冊についてのビブリオグラフィック・レビューである。著者は、多年にわたり日本人の生活・文化・心理・行動の社会心理学的研究を続けてきたが、そこで扱った数千点の論著の中から、「日本人論として独自の見解を持たないもの」は捨象し、著者の視覚から一つの国民性論としてまとめられたものである。(…)

しかし評者としては、若干の物足りなさを感じてしまう。確かに日本人論のレファレンス・ブックを網羅的に列挙したのは申し分ないのだが、取り上げらえた日本人論への著者のコメントがあまり見られない、という点においてである。(濱口恵俊による書評、「社会学評論」49号)

死産される 日本語・日本人

「日本」の歴史-地政的配置

sakai naoki

酒井直樹

新曜社:1996
講談社学術文庫:2015



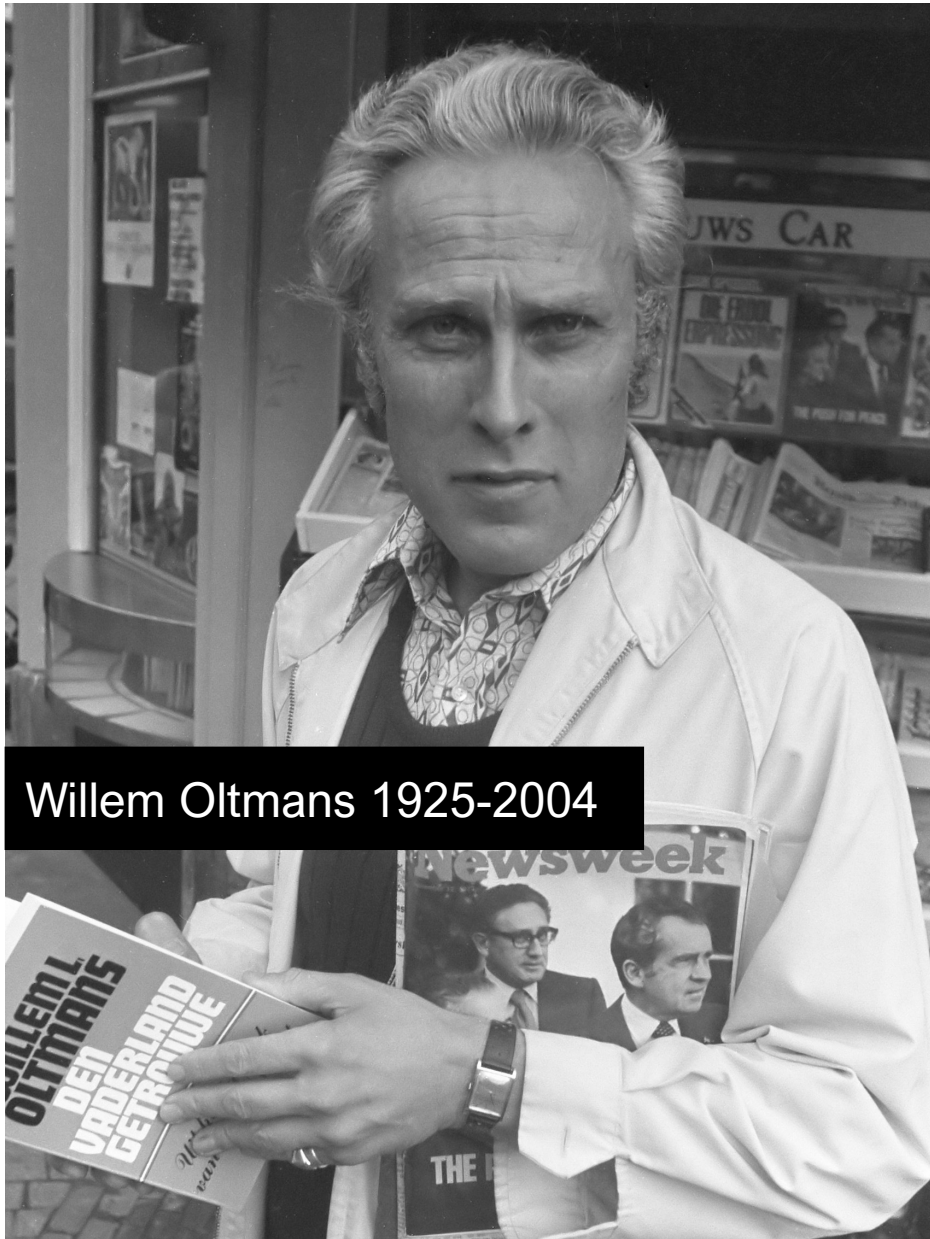
1980年代に繁盛した、威勢の良い日本成功物語とそれに対応する「ジャパン・バッシング」の議論は、精神分析でいう転移の相補的な局面を表していたといつてよいだろう。(・・・)日本人論一般は常に仮想された西洋人に向けて語り出されていた。それは、西洋人による認知を密に懇願する議論だったからである。

日本人という自己画定は、このような西洋対日本という配置を前提にしており、明治維新を通じて、それまでの中華中心の秩序から離れ、国際世界の中で国民国家として国民共同体を制作することを決意して以来、日本の国体 nationality は、西洋対日本という地政的な配置の中でしか可能にならなかったからである。

日本の人々は、伝統的な価値観と民主主義の近代的な概念との折り合いをどのようにつけているのですか？ この二つは衝突しないのでしょうか、それとも日本人は共存の道確立したのでしょうか？

天皇制を廃止しない限り、真の民主化は日本に訪れないと思っています。

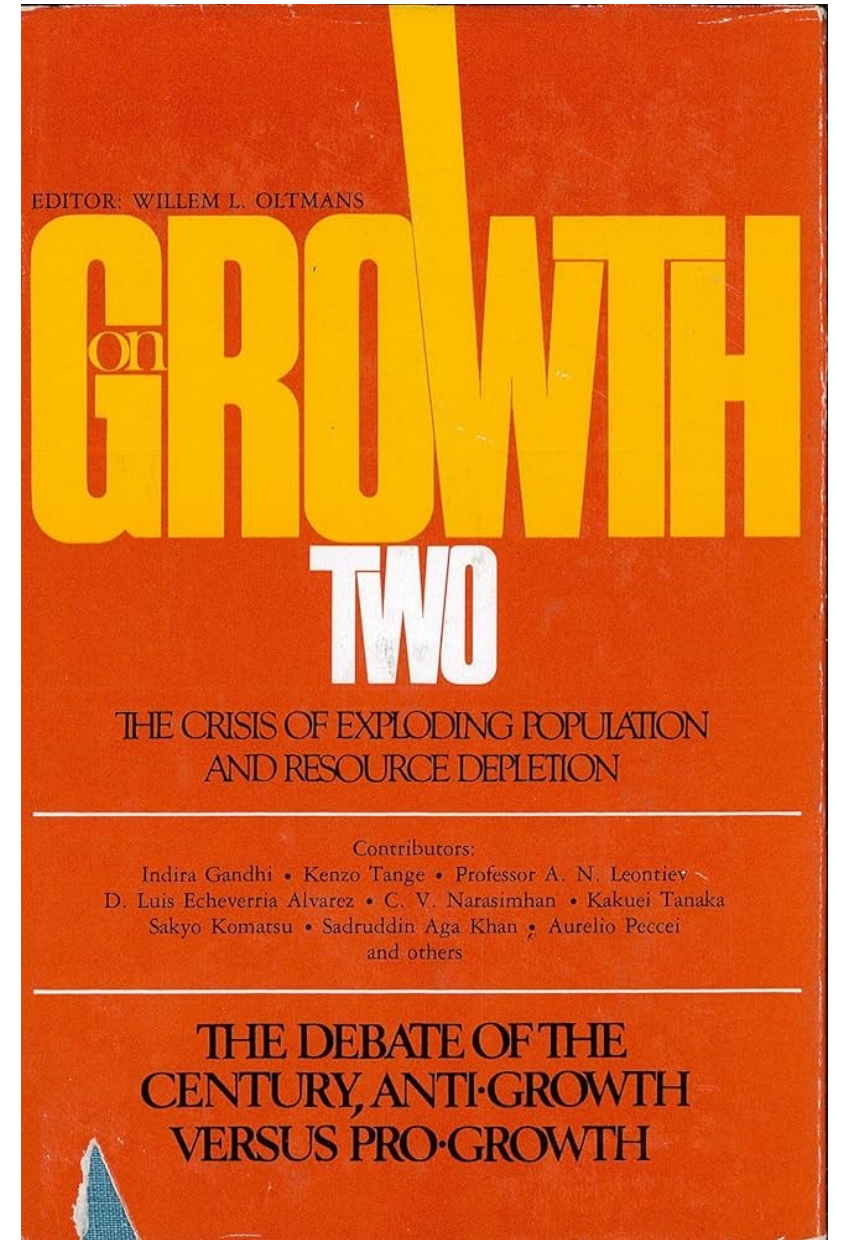
(オランダ人ジャーナリスト、ウィレム・オルトマンの問いに答えて)



Willem Oltmans 1925-2004

島秀雄(鉄道技術者)
 衛藤瀋吉(国際政治学者)
 中根千枝(人類学者)
 佐藤方哉(心理学者)
 南博(社会学者)
 茅陽一(環境学者)
 青木昌彦(文化人類学者)
 田中角栄(政治家)
 大来佐武郎(外交官)
 林雄二郎(社会学者)
 河野洋平(政治家)
 野口武彦(文芸評論家)
 小松左京(作家)

インタビュー合計は45人、
 そのうち日本人は13人
 (旧ソ連、日本、非欧米諸
 国が対象)



しかし、モダニズムは、ファシズムと戦争の暗い時期にも、まったく息の根を止められたのではなく、いわば地下モダニズムとして生命をつないでいった。たとえば戦没学生的一句「ジャズ恋し早く平和になればよい」を見よ。

「日本モダニズム研究の方向—おぼえがき」
『日本モダニズムの研究』(ブレーン社出版:1982)

ルイーズ・ヤング

21世紀における占領期研究再考

(「インテリジェンス」VOL17)

民主化され、非軍事化された新しい日本というイメージと、アメリカによる占領は成功だったとする歴史的なステレオタイプは、1965年から71年にかけて、プリンストン大学出版より刊行された叢書『日本近代化の研究』*Studies in the Modernization of Japan* によって、強固なものとして確立されていく。近代学派、またはプリンストン学派と呼ばれる彼らの研究は、日本研究の基本的文献として重要な役割を果たした。これら初期の研究に顕著な「アメリカの成功体験としての日本占領」というステレオタイプは、広範な議論のために不可欠なものでもあった。

三井合名の豪壮な建物をめぐる何十本かの支柱は何故に存在するか？—この、一本萬金の費用を消費した支柱の内部には、唯だ石材の外皮を支へるだけの目的を持つ強固な鉄骨が隠されてゐる。

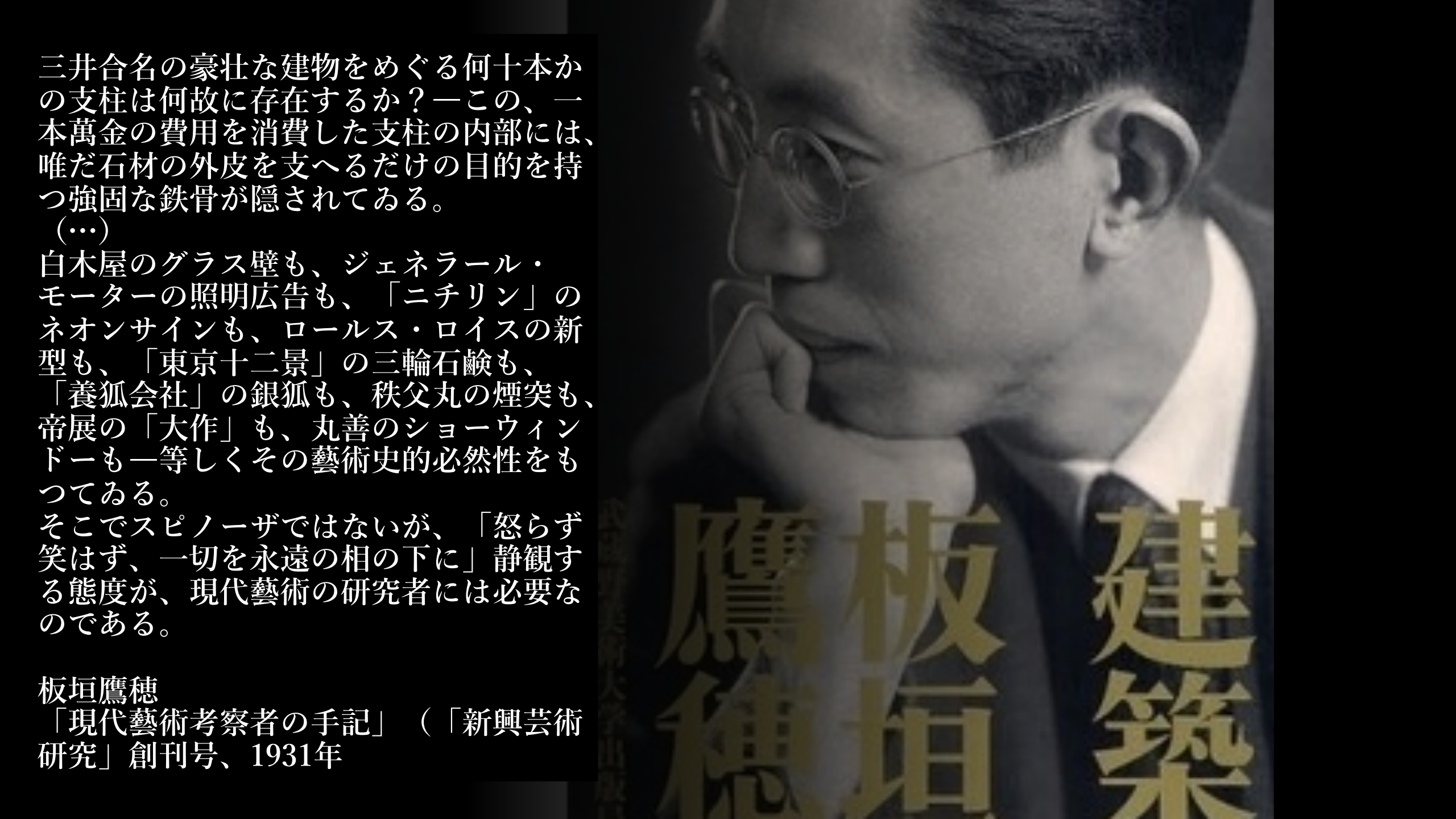
(…)

白木屋のガラス壁も、ジェネラル・モーターの照明広告も、「ニチリン」のネオンサインも、ロールス・ロイスの新型も、「東京十二景」の三輪石鹼も、「養狐会社」の銀狐も、秩父丸の煙突も、帝展の「大作」も、丸善のショーウィンドーも—等しくその藝術史的必然性をもつてゐる。

そこでスピノーザではないが、「怒らず笑はず、一切を永遠の相の下に」静観する態度が、現代藝術の研究者には必要なのである。

板垣鷹穂

「現代藝術考察者の手記」（「新興芸術研究」創刊号、1931年



鷹穂 板垣 建築